



No.120



リアン文京 Cafeコンサート



谷在家福祉作業所 生活介護（音楽クラブ）



平成29年度第2回利用者支援研究会合同学習会

INDEX

4年目のつばやき…………… 2	施設紹介「谷在家福祉作業所」…………… 8
災害対策委員会での活動における	平成29年度利用者支援研究会
1年間の振り返りと今年の抱負…………… 3	第2回合同学習会報告…………… 9
利用者支援研究会学習会報告（保健医療）… 4	リレーコラム「一緒に年齢を重ねる」／
部会役員紹介…………… 5	編集後記…………… 10
施設紹介「リアン文京」…………… 7	

●発行者 知的発達障害部会 部会長 坂本 光敏 ●編集 知的発達障害部会 広報委員会

●発行所  東京都社会福祉協議会

〒162-8953 東京都新宿区神楽河岸1-1 TEL 03-3268-7174 FAX 03-3268-0635

●東社協ホームページ (<http://www.tcswww.tvac.or.jp/>) からご覧いただけます。

現在の制度では障害者支援施設ですが、昭和20年代後半から30年代にかけては、まだ障害者福祉法がない時代で、法令の根拠は児童福祉法でしたが、第一次の入所施設建設のピークがありました。当時の言葉をそのまま使うと、精神薄弱児施設と呼ばれました。戦前からある滝乃川学園や大島藤倉学園などを除き、部会の入所施設分科会を構成する古い施設の多くはこの時代に開設されました。私が所属する法人でも、前身の財団法人時代の昭和33年から入所施設建設の動きがあり、多くの方の努力により、苦難の末6年後に千葉県柏市に児童入所施設が建設されました。

当時はまだ学校教育法の修学猶予・免除の制度がある時代で、障害当事者に教育と生活支援を受けさせるために家族は奔走したのです。我が法人の創始者の一人は「座敷牢」の存在が施設建設に向かわせた大きな原動力だった。」と、後に述べていました。この就学猶予・免除の制度は昭和40年代後半の全員就学制度化まで続きます。「障害がある子は学校に行かなくても良い。」そんな制度が無くなってまだ50年も経っていません。そして長い歴史の中ではわずかな時間なのかもしれません。

さて、障害のある42才の長男を20年以上も自宅のプレハブの中の檻に閉じ込めてきたとして、兵庫県の73才の父親が逮捕されたというショッキングな報道がなされています。この市の障害福祉課が通報による虐待の事実を確認したのは今年の1月中旬で、長男は片目を失明しており、もう一方の目もほぼ見えない状態で、1ヶ月後の2月中旬に、ようやく福祉施設に入所することになったと伝えられています。

檻に入れることになったきっかけは「他害がひどいから、周囲に迷惑をかけられない。」との理由だとのことでした。新聞報道によれば、施設入所まで1ヶ月かかったことについて、市の担当者は「生命・身体に危険があるほどの緊急性はないと判断し、通常の福祉サービスを提供していく。」と述べているとのことでした。

兵庫県と言えば、芦屋市に、昭和2年に既に「治療教育院」という児童の施設が開設されており、

日本の知的障害者福祉では先駆的な役割を担ってきた地域でもあります。逮捕された父親が障害のある長男を檻に入れた20年前は、昭和57年の国際障害者年（障害があっても共に生きる社会の実現・共生社会という言葉が世界で始めて使われ、福祉の担い手が民間から行政へ転換するという、日本の障害者福祉施策に極めて大きな影響を与えた。）の大波を越え、養護学校も義務化され、グループホームも制度化された平成の世になってからです。長男の年齢を思えば、学校を卒業してしばらくは、地域社会との接点があったと思われます。しかし、父親が我が子を檻に入れることによって守らねばならない決定的なことが起こったのです。そして、この父親の意思決定に至るまでに、違った方法を提案し実現する私たち福祉関係者が関わることが無かったのかどうか、検証されなければ、長男の失われた20年はあまりにもかなしいものです。

今年から5年間の国の第4次障害者基本計画が閣議決定されました。この計画は次に掲げる3つの社会の実現にも寄与することが期待されていると述べられています。（まま）

- ① 一人ひとりの命の重さは障害の有無によって少しも変わることはないという、あたりまえの価値観を国民全体で共有できる共生社会
- ② 2020年東京オリンピック・パラリンピックにおいて、成熟社会における我が国の先進的な取組を世界に示し、世界の範となるべく、女性も男性も、お年寄りも若者も、一度失敗を経験した方も、障害や難病のある方も、家庭で、職場で、地域で、あらゆる場で、誰もが活躍できる社会
- ③ 障害者施策が国民の安全や社会経済の進歩につながる社会

この文章に述べられた理念と地域社会の現実とを比較しての嘲笑はいくらでもできるかもしれませんが、そんなことをしたって、なによりも障害当事者は浮かばれません。

今年も私たちのスクラムに新鮮な仲間が多数加わりました。気負わない本気度で、出来るところから着実に「彼らの幸せの実現」に貢献して行きましょう。

災害対策委員会での活動における 1年間の振り返りと今年の抱負

災害対策委員会 委員長 岩田 雅利

平成29年度は委員会設立初年度ということで、委員会の活動目的や役割についての話し合いが中心となりました。前身の東日本大震災復興支援特別委員会では、被災地支援として、主にアウトリーチ主体の活動でした。東京が被災地となった場合を想定した防災や減災対策、そのための自助共助の仕組みづくりは、はじめての取り組みとなります。

話し合いをはじめて、まず委員を悩ませたことは、これまで見てきた東日本大震災や熊本地震との規模や環境の違いです。人口や建物の密集度や、交通事情、施設職員の住環境など、東京ならではの特殊性から、どこから手をつけたらいいのかわからない、というのが正直なところでした。当初は、いくつかの想定されている巨大地震を例に、発災した場合のシミュレーションを行い、必要な対策を考えていこうと議論を開始しました。委員の所属する施設の種別や立場の違いで、様々な意見が出されましたが、部会として果たすべき役割を考えると、なかなか建設的な話し合いになりませんでした。そこで、まずは被災時における知的発達障害部会の情報収集の仕組みづくりから着手しようということになりました。他県でも県社会福祉協議会や各種別部会が同様の取り組みをしていますが、

東京はその規模の違いから、独自の仕組みづくりが必要であり、発災時に部会内で少しでも効率的な自助共助が行われるためには、的確な情報収集が不可欠と考えました。

災害時は、まず事業所内、そして法人内や地域自治体内での自助共助が行われます。その次の段階として、部会等の所属団体の支援が大きな役割を果たします。また、他県等からの支援を必要な場所に供給するためにも、ある程度の広域情報の収集と発信が必要となります。東京都には『東京都災害福祉広域支援ネットワーク』という、大規模災害の発生を想定し、平時から、東京都福祉保健局、区市町村、東京都社会福祉協議会、区市町村社会福祉協議会、東京都社会福祉協議会施設部会、福祉専門職の職能団体が連携して、災害対策の強化を図るネットワークがあります。当部会も所属し、ネットワーク内の様々な関係機関と連携していきます。

今年度からは、初動マニュアルの整備と、情報収集のためのブロック化等の仕組みづくりの検討をはじめています。まだ手探りの活動ではございますが、今後とも、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

『終末期ケアを考えてみよう』

澄水園 三井 守哉

保健医療スタッフ会では、年3回の学習会を計画しており、去る平成30年1月27日（土）に今年度第3回目の学習会を行いました。今、施設入所支援の事業所のみならず通所系事業所でも“高齢化”が顕著となり大きくクローズアップされて来ました。入所施設分科会・利用者支援研究会支援スタッフ会学習会においても、各事業所での高齢化への対策等の事例報告会が行われています。このような状況において、今回、保健医療スタッフ会では、高齢化において避けて通れないテーマでもある“終末期ケアを考えてみよう”～高齢化が顕著となっている今、私たちは何をすべきか～と題して、神奈川県厚木市にある（社福）かながわ共同会厚木精華園の施設長・平嶺一昭氏をお迎えして講演をして頂きました。厚木精華園は、施設入所110名・短期入所2名・生活介護140名定員のまさに大規模施設で、平均年齢68歳と高齢化が進んでおり、同時に、かねてから知的障がいがありながら認知症を患っている方への研究も行われていました。平成28年度からは、具体的な高齢化への支援・看護の一つとして「終末期支援プロジェクト」を設置し取り組みの開始となりました。プロジェクトチームとして、高齢者の事業所で実際に看取りを行っている所の嘱託医の方の話しを聞いたり・又、神奈川県では唯一、知的障がいの事業所で看取りを行っている所への見学会を実施したりと、多くの議論が厚木精華園診療所の医師・看護師・現場の支援スタッフ等の間で行われた様子でした。この議論において、～看取りをする為の前提条件として～

1. 24時間の医療体制の確保
2. 看取りに取り組むと言う全スタッフ間の共有体制の確保

～厚木精華園の実情として～

1. 医師の常駐は無く、看護師もシフト勤務のみ
2. 事業所の立地条件として、神奈川県下では同様な事業所が数カ所点在されている地域で、在宅専門医等のスタッフ確保が困難

3. 事業所の個室等ハード面が不十分
～その為、今、実際に出来る所から始めると言う事で～

1. 死への準備教育（訪れる死を見つめる）への取り組み。厚木精華園では、身寄りが無い方の為に事業所で墓地を確保。生活介護の活動中に、毎月、墓参りを実施。同時に、事業所で葬儀を開催、また葬儀に関するマニュアルを作成。
2. 延命処置に関する希望カードを作成
3. 退所後支援サービスへの検討～退所されて病院に入院中の方への見舞い・葬儀・遺留品処分等

ただ、これだけ多くの議論を行っても、チームのメンバー間で意識の共有ができていないのも実情だと話がありました。

実際に看取りを行っている事業所の施設長の方は、「現実的に言えば看取りはしない方が良かった。看護師含め多くの職員の負担感が増すばかり。疲弊感も一杯だ」と。対して、高齢者の事業所の嘱託医の方の話の中では、「ある方が死の直前、缶ビールが飲みたい」と。嘱託医の方は、「誤嚥防止の為、理学療法士の方とベッドのギャッジが何度だったら、一番、むせる事が無いか等検討を重ね缶ビールを飲んでもらった。その時の、この方の笑顔が素敵で忘れる事が出来ない。関わった全ての職員も笑顔をもたらした。」とっていました。対照的なケースでしたが、今回の学習会において印象に残る部分でもありました。課題が残ると同時に、参加された方が各事業所に持ち帰り、一つの議論を始めるきっかけになればと思われました。

保健医療スタッフ会では幹事の方の募集を行っております。ますます高齢化等が進んでいく中、保健医療スタッフの方の役割は増すばかりです。一方、少数で勤務しなければならない事業所の現状においては疲弊感が増すばかりではないでしょうか。横の繋がりを持つ事で、多くの保健医療スタッフの方が元気になられ、笑顔あふれて仕事ができる事を願うばかりです。

部会役員紹介 第1弾

知的発達障害部会
役員会



気負わない本気度で
みんなの幸せの実現
に貢献していきます！

文化・芸術活動
支援特別委員会



今年もSESSIONを
開催し、皆様が楽し
めるよう努めます！

災害対策委員会



東京ならではの災害
対策を目指します！

利用者支援研究会



今年も研修を沢山行
い、皆様の勉強の機
会を提供します！

研修委員会



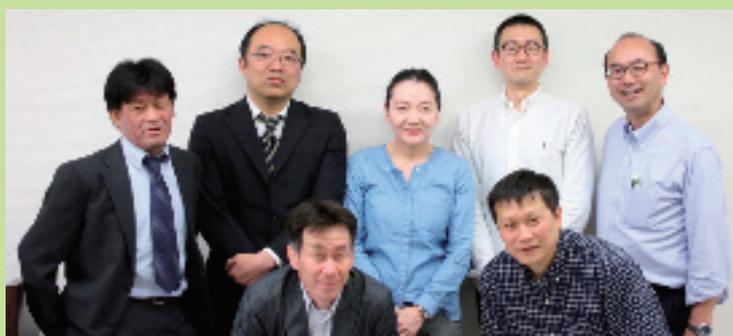
職員のスキルアップ
を目指し、新任研修
やチームリーダー研
修を行います！

人権擁護委員会



利用者も職員も幸せになれる支援を目指して、ポジティブな権利擁護の取り組みを発信していきます！

通所支援分科会



今年もおもしろい研修をたくさん企画します！是非来てください！お待ちしております！

入所分科会



利用者さんと一緒に成長していきます！

共生社会研究
特別委員会



今年は新しいメンバーも加わり、フレッシュな気持ちで頑張ります！

広報委員会



みんなに楽しく読んで貰える「かがやき」を作ります！みんな読んでね!!!

施設紹介

リアン文京

【都市型複合施設】

平成27年4月に文京区小日向2丁目の地（有楽町線江戸川橋下車 徒歩4分）に社会福祉法人武蔵野会が運営するリアン文京が開設しました。

事業としては、障害者部門では入所支援（定員40名）を中心に生活介護（40名）、重症心身障害者通所事業（5名）、就労継続支援B型・A型（各10名）、自立訓練（生活訓練・機能訓練）（定員15名）、放課後等デイサービス（定員20名）があります。

地域部門として短期入所（定員10名）、地域活動支援センターI型（定員10名）、居宅介護、特定相談支援事業、日中短期、軽度障害者入浴等の事業があります。

その他、武蔵野会が運営するシニア部門の「文京福祉センター江戸川橋」では老人福祉センターA型と介護予防事業、こども部門では「子育てひろば江戸川橋」でひろば型の子育て支援、こどもショートステイを運営しています。

これらの事業を文京総合福祉センター（地下1階、地上4階）の全館を使い都市型複合施設として一体的に運営しています。

リアン文京は、開所して4年目を迎えます。各事業の専門性をさらに磨き、それによって都市型

複合施設の総合的機能を十全に発揮できるよう頑張っていきたいと思っております。

【地域とともに】

リアン文京のリアンは仏語で「絆」を意味します。チームミッションを「絆社会の実現」として掲げ、共生社会の実現に向けて開設当初より様々な地域活動を行っています。1階にある「Caféぶんぶん」では多世代間交流プログラムである「縁が和Cafe」を月1回、Caféコンサートを月2回行っています。

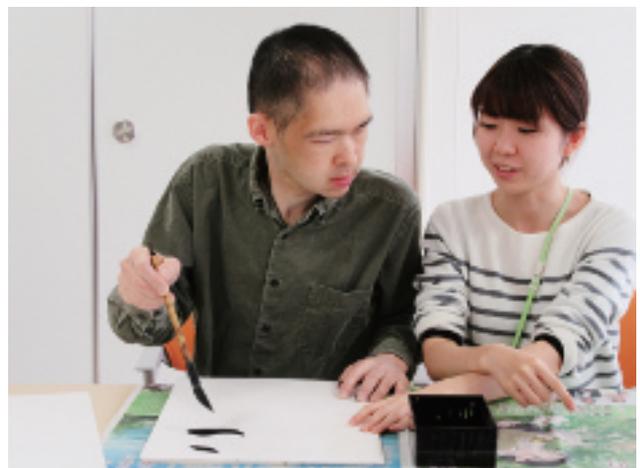
また、生活困窮者支援として学習支援、フードバンクの食糧配付、リアン食堂、引きこもりの中間就労等の地域公益活動を行っています。また、地元の自治会とも開設当初より町内イベントに積極的に参加し、交流を図っています。

リアン全事業を利用される方は年間15万人に上ります。これらの方を中核にして地域に新しい風を吹き込めたらと願っています。

社会福祉法人武蔵野会
リアン文京 野村 美奈



活動



作品

施設紹介

谷在家福祉作業所

【施設概要】

谷在家福祉作業所は、生活介護、就労継続支援B型、就労継続支援A型の多機能型事業所です。元々、区立の福祉作業所でしたが、現在は社会福祉法人あたちの里が運営しています。

【事業概要】

① 生活介護事業（定員30名）

おしぼり作業、チラシ折り、ガーゼ折り、バリ取り等の受注作業を行っています。おしぼり作業は全員のご利用者が関われる作業なので、全員の力で頑張っています。健康面を考えて、スポーツや体力作りにも取り組んでおり、天気良ければウォーキング、天気が悪ければホールで理学療法士指導の下での「体操」やパラリンピックの時に話題となった「ポッチャ」を行っています。また、音楽・創作・トランポリンの中からご自身でやりたいクラブを選び、週に1回クラブに参加しています。

なお、作業室にて、無添加・無着色・無香料のせっけんを販売していますので、ぜひお試しください！

② 就労継続支援事業B型（定員20名）

数年前までは仕事が少ないという日も、遠い思い出…現在では業者との関係、連携をしっかりとることにより毎日多忙な日々を送っています。仕事がない日はなく、毎日が違う作業なので、やりがいとメリハリを持って仕事に励んでいます。日頃の頑張りが工賃にも反映され、ここ数年ではびっくりするくらいの年度末手当をお支払いすることができました。自主生産品の「やざいけせんべい」も好評発売中です！

③ 就労継続支援事業A型（クリーンチーム）（定員10名）

福祉施設や公共施設3カ所の清掃委託を受け、日々清掃業務に励んでいます。但し、毎日何気なく清掃している訳ではなく、自立講座（勉強会）で実技試験を行ってそれぞれの苦手な所を確認したり、得意分野を伸ばしたりしています。また、外部研修にも毎年参加し、『働く』ということ、『就職するためには』という観点から、直に外の空気に触れていただく機会も設け、刺激を受けながら日々の仕事に励んでいます。



施設の外観（地域の皆様から「とんがりぼうし」と親しまれています）



B型（箱折り）

3月10日に開催された合同学習会にはのべ110名以上の方が参加され、NPO法人東京都自閉症協会・NPO法人リトルプロフェッサーズの綿貫愛子氏の話真剣に聞いていました。綿貫氏はアスペルガー症候群の当事者であり、臨床発達心理士として当事者だからこそできる啓発活動を行っています。

テーマとして綿貫氏が掲げたのは2016年に開催されたヨーロッパ自閉症国際会議でのキーワード「Happy, Healthy and Empowered」でした。

支援者に知っておいて欲しい事と題し、自閉症は社会性の問題とされていた事に対して、自閉症であったとしても社会性は身につけている。自閉症児であっても状況によっていつもと違う事はわかるので、行動を変える事ができると話されていました。それに加え、自分の体験談として「嬉しいときやストレスがかかった時にジャンピングや手を叩きたい衝動が内側から湧き上がってくる。学校へ行くと子どもたちも状況に合わせて自分の行動を調整していることに気づく」と話されていました。

そして、自閉症は社会性やコミュニケーションの障害と言われることへの弊害として、①特定の人々に社会への過剰適応を敷いているのではないかと②背景にある感覚や認知の特性が見落とされ、対処療法的な「適応」が目標とされやすい③社会的多数の視点からの支援が多く、幼少期からの早期療法により本人・親の準備が出来ていないのに「自閉症」が先立ってしまいアイデンティティが尊重されない。パターン学習が悪用され、自分の意思がなくなってしまうと現在の支援の問題点をあげていました。

自閉症児は愛着行動や愛着形成に遅れがあることについて、綿貫氏自身が交流したいと思う気持ちが芽生えたのが中学・高校時代だったとし、生活年齢とは不一致であったといいます。それを愛着行動として受け入れてくれるかどうかでその後が変わるとお話しされていました。また、人と物の違いが長年わからず、物の友達が多かったとのことで、人間の友達は中学時代までいなかったそうです。同級生や先生との関係性がうまく築くことができないと心理的に苦しくなるため、学校や家以外に自分の好きなことをできるコミュニティ

が重要であることもお話しされていました。

コミュニケーションの方法ではクレーン行動を「1つの物事を相手と共有したいという動機を伴った、コミュニケーション手段」とし、また何度も同じ質問をすることに関して「同じ答えが返ってくる様式に安心感がある。しつこいときはあと〇回ねと区切ってほしい」と。また、エコラリアは「即時性の場合、理解するために繰り返すか質問の答えになっている。遅延性の場合、不意に頭に映像的記憶が再生される。楽しい時も不安な時も出現する。エコラリアは言葉に親しむ為の行動」と私たちには新鮮に感じる内容ばかりでした。

拘りに関する内容では、「同じであることは当たり前であり、世界の秩序」と仰り、最初に覚えた物・聞いたものが強い記憶になり、影響していくとの事で、予定の変更は「天地がひっくり返る驚き」と仰っていました。その為、「変更になる可能性があります」という言葉があるだけでだいぶ違うのだそうです。また、いつでも予定を確認できる掲示物や持ち物の中に入れてもらえるとありがたいそうです。また図鑑や一覧表を用いて世の中にはいろいろなもの（調理方法等）があると理解できるものがあるとわかりやすいともお話がありました。

感覚遊びについて綿貫氏は「自分の気持ちや行動を調整する働きがある」とし、ジャンピングでは気持ちを整えることができる内的感覚がある事や手を叩いたりして乱れていたものが整っていくと落ち着くことができるとして、その場や活動に参加するための頑張り行動であるとお話しされていました。

最後に日本で使用されている支援方法について綿貫氏の考えでは重要性は乏しいと話し、これからの支援として①社会性やコミュニケーションデザインを大切に。自己刺激行動やクレーン行動など、行動の意味を考える②ある行動について、`だれ`が拘っているのか考える③支援者や親のニーズと本人のニーズは異なる事が多い。本人の意思を尊重してほしいと掲げ、「自閉症児・者はコミュニケーション意欲に溢れており、それを共有してもらえると嬉しい。当事者が好きな事から世界は広がっていく」という言葉で学習会は終了となりました。

一緒に年齢を重ねる

31

社会福祉法人江東楓の会 高齢障害者通所施設さくら 施設長 岸 芳美

私が働いている「高齢障害者通所施設 さくら」についてご紹介させていただきます。

さくらは知的障害の方を対象にした通所の生活介護事業所ですが、入所の条件として「おおむね50歳以上」とさせていただいています。

ここでは現在17名の方が利用されています。最高齢の方は82歳、一番若い方は4月に入所したばかりのピチピチの新人さんで48歳の方です。平均年齢は66歳となります。

多くの利用者さんは、民営授産が立ち上がったばかりのころに作業所の利用を始めた方や、特例子会社のない時代に零細企業で長年働いてきた方、なかには40年近くどこにも籍を置かず在宅で過ごされてきた方もいらっしゃいます。

もちろんこの年齢で通所ができている方たちですから、もともと働くことに意欲があり、ある程度身辺自立の力があつた方たちです。

事業所では、日中活動としての作業や自主生産の他、健康体操やウォーキングなど健康の維持に必要なプログラムや、リラクゼーションなどに力

を入れています。驚くことに給食は全員普通食で（刻みなどはしない）完食されることがほとんどで、通院遅刻や早退を除けばほぼ皆勤で毎日元気に過ごされています。

ただしこの年齢になるとそれぞれ体力も落ちてきており、持病をお持ちの方が大半です。多くの方は送迎バスを利用されています。

私自身江東区の事業所で働き始めて30年を過ぎ、親の会の皆さんが無認可の作業所作りに一生懸命だった時代に、数名の利用者と関わってきました。あれから数十年を経てまた一緒に時間を過ごすことになった方もいらっしゃいます。

日々の会話の中では戦時中の疎開の話が出たり、都電のあつた時代、工場の多かつた当時の江東区の話、昔見たテレビや音楽など共通する話題も多く、自分自身が同じ時代（昭和・平成）を生きてきたんだなと感じることが度々あります。

これからもみなさんと一緒に毎日楽しく、生き生きと生活が続けられるといいなと思っています。

今回は、社会福祉法人はなゆめ 松崎氏のコラムです

編集後記

気温が30度近くなる日も多くなり、夏に近づいていると感じるようになりました。

私の働いているグループホームの近くの小学校では運動会があり、元気な声が届き利用者の方と窓から運動会の様子を見ていました。

雨で出勤が憂鬱になることも多い月ですが、私は出勤時に気分があがる傘を先日購入しました。是非皆さんや利用者の方にも梅雨を楽しめるグッズをお勧めします。夏までの間を楽しんでみて下さい。